

「田んぼの水族館in橿原市昆虫館」関連企画

「田んぼの学校」講演会

平成25年9月6日
橿原市昆虫館 研修室

農と自然の研究所代表の宇根 豊さんを講師に招き、「農業農村と自然とのつながり～生き物のにぎやかな田んぼの役割～」をテーマに講演をいただきました。

農業者、大学生等一般者及び土地改良区、国、県等関係者計43名に参加いただきました。

田んぼの広がる農業農村は「親しみやすい自然」であること、トンボやカエルの99%は田んぼで生まれており、お茶碗1杯のごはんを食べることは、35匹のオタマジャクシを育てていることにもつながること等、農業農村の保全の意義について興味深いヒントを多くいただきました。



条里制の多く残る奈良の田んぼでは、千年以上も稲作が行われています。田んぼを大規模化すると機械化が大幅に進み、生き物へのまなざしがなくなってしまいます。“1筆1反”の田んぼを守ることは“奈良らしい田んぼ”の一つあり様では、との提案もいただきました。

◆参加者からのご感想

- 多くの気づきがあって非常に有意義だった。自分に何ができるか考えるよい機会になった。(20代、非農家)
- 毎年同じように田んぼで稲作が繰り返されるのが大切だということが頭に残った。(60代、非農家)
- 中山間地域の農村や棚田は、今後も残していきたい風景。(40代、非農家)
- 田んぼは米を作るところという意識しかなかったが、身近な自然であり、生き物がたくさんいる。田んぼを見る意識が変わった。(40代、非農家)
- (農家が) 農外効果に対する補助をもらえるように国民に理解してほしい。(40代、農家)
- 農業があってこそ環境は保たれると思う。(耕作放棄された) 荒地が自然なのか?と思う。(60代、農家)